

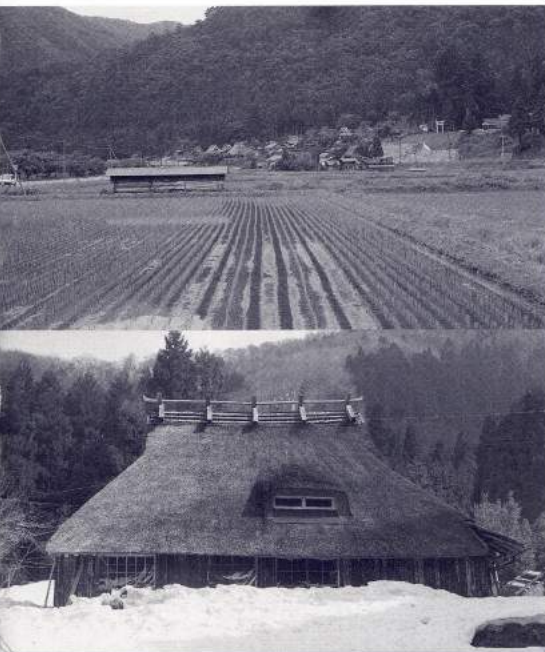


草

葺

の
ちから

家



上…京都府美山町の北集落。
国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。
撮影：安藤邦廣
下…佐伯家。
屋根に開いた明かり取りの小窓
(アイブロー・ウィンドウ)が特徴的。
撮影：佐伯弘

べてが茅葺きである。この集落は世界遺産に先立って1976年に国の重要伝統的建造物群保存地域の選定を受け、国、県、村の補助金で合掌造民家を保存してきた。その8年前の1968年には、住民自らが白川郷合掌家屋保存組合を結成しており、過疎化対策と農業に代わる経済基盤としての観光振興のために、住民と行政が一致協力して合掌集落を保存してきた。その長年にわたる努力の結果、100棟あまりの茅葺き屋根を残す日本で最も大きい茅葺き集落が奇跡的に今日まで生き続けてきたのである。

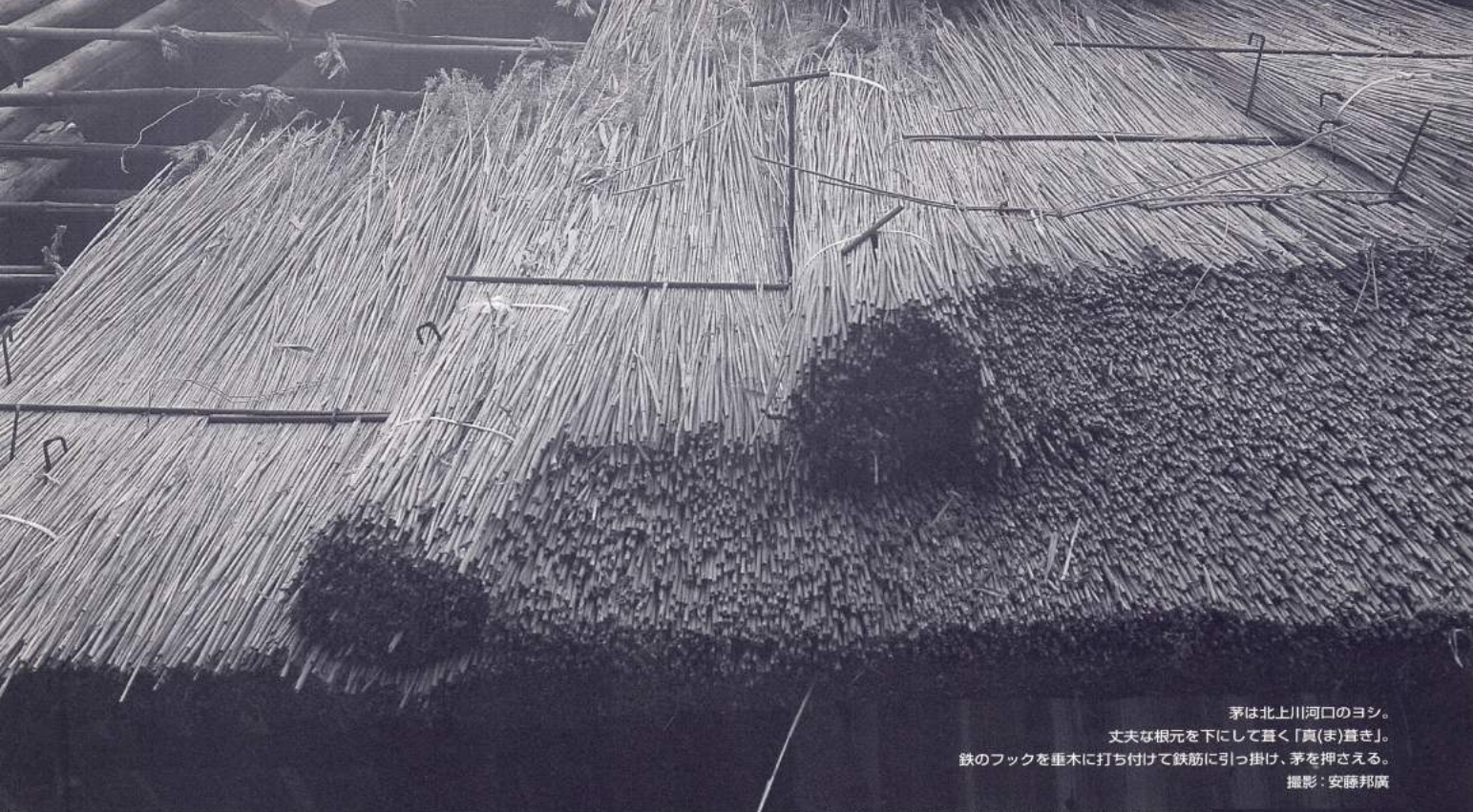
この地域の茅葺きの特徴は合掌造という特異な屋根形態もさることながら、ユイ制度の存続にある。屋根を葺く職人は存在せず、村人の共同で行う慣習が今日まで受け継がれてきた。ユイはそのための相互扶助制度であり、屋根葺きに伴う労働、茅の採集、当日の食事のまかないにわたって、労働の貸し借りを行うもので、茅葺き屋根を維持するために規模の差はあれ日本の各地に普遍的に見られた慣行である。白川郷のユイは、1軒の屋根を葺くの100人以上の村人が共同で葺き上げる壮大なもので、厳しい自然環境の中で暮らしを営んできた村人の、運命共同体としての結束の強さを物語るものといえる。農村の近代化の中で茅葺きが減びていくのは、このようなユイの慣行が崩れさっていくことがその根本的な要因なのである。

世界遺産の指定は、この長い伝統をもつ強固なユイ制度に微妙な変質をもたらした。屋根を葺く際に、ユイを頼まなくなったのである。合掌家屋保存組合は存続しており、茅の手配や貯蔵、技能の研修を共同で行い、屋根を葺く順番の調整などの面で機能しているが、屋

根を葺く仕事は専門に行う村内の業者が請け負うようになった。これまでも業者に請け負わせて屋根を葺く場合があったが、それは業務用の食堂などとして利用するために合掌家屋を他の集落から移築する場合などに限られており、住まいとしての合掌造の葺き替えには必ずユイが機能してきたのである。この変質は、観光客の急増に伴い荻町全体が観光業に関わるようになったため、多忙でユイが成り立ちにくくなったこと、また屋根を葺く経費も観光収入の増大でそれほどの負担にならなくなったこと、したがって、100人を超すユイの手伝いを頼み回り、接待することを煩わしいことと感じ、請負に頼む方が簡単で楽だと思えるようになったことによる。ユイ制度に支えられた合掌造集落ゆえに世界遺産となった。その世界遺産の指定がユイ制度を形骸化するとしたらこれほど皮肉な話はない。屋根葺きの専門化は歴史の流れであるが、専門化された茅葺き屋根が職人の高齢化と後継者の不足によって減びてゆく過程をたどるのもまた歴史の教えるところである。一方でユイ制度がそのままのかたちでは存続が難しいのも現実である。現代に即した柔らかなユイの創出が21世紀に茅葺きが生き延びるひとつのかたちに違いない。

京都府美山町

現在最も多くの茅葺き屋根を残すのは神戸市とこの美山町である。関西の大都市近郊に300棟を越す茅葺き屋根が残っているところがあるのは意外な感じがするが、都市の近郊農村としての安定した経済基盤と関西の保守的な文化風土が存続させてきたといえる。この町を代表する茅葺きの里、北集落には30



茅は北上川河口のヨシ。
 丈夫な根元を下にして葺く「真(ま)葺き」。
 鉄のフックを垂木に打ち付けて鉄筋に引っ掛け、茅を押さえる。
 撮影：安藤邦廣



左…佐伯家の葺き替え作業。ハシゴを登っているのがロジャー・エヴァンズさん。英国式の茅葺きは職人1人で葺くことができる。
 撮影：安藤邦廣
 右…フックと鉄筋。
 撮影：安藤邦廣

佐伯家。厚さ約30cmの茅葺きは、日本の茅葺きよりも軽やか。
 撮影：佐伯弘

棟あまりの茅葺き民家が保存され、国の重要伝統的建造物群保存地域に選定されている。この茅葺き集落の特徴は職人が健在で、若い後継者が育っていることである。このように後継者の育成に希望の持てる地域は極めて限られていて、美山町の他には宮城県北上町や岡山市が挙げられる程度である。美山町では20~30代の若手4人が茅葺き職人として修業に励みながら、全国に散らばる若手の職人との連絡網をつくり、互いに研修を重ねて、21世紀に茅葺きが生き延びる方策を模索している。

北集落に程近い田歌の佐伯さんのお宅では、1999年の秋にイギリスから職人を招いて英国式に屋根を葺いた。その豊かな自然環境と昔ながらの農村風景に魅せられて、京都などの都会から美山町に移り住む住民が近年目立って増えている。佐伯さんも数年前に空き家となっていた茅葺きの古民家を買上げ、移り住んだ。ご主人は芸術を志しており、奥

美山町で、1999年10月に全国茅葺き民家保存活用ネットワーク協議会の主催により、英国の茅葺き技術を参考に日本の茅葺き技術の将来を考える「第1回茅葺きフォーラム」を開催した。佐伯家の見学会や安藤邦廣、ロジャー・エヴァンズさんによる講演会、エヴァンズさんと全国から集まった茅葺き職人を交えての座談会などを催し、活発的な意見交換を行った。

全国茅葺き民家保存活用ネットワーク協議会は1999年4月に発足し、全国の茅葺き民家の所有者、職人、研究者、行政関係者などからなる会員が情報を交換し、茅葺き民家を後世に残すことを運動の目的とする。事務局は(財)日本ナショナルトラストに置いている。2000年10月には第1回の総会を長野県白馬村で開催する。

問合せ:日本ナショナルトラスト…電話03-3214-2631

さんは米国人でフリーライターとして活躍している。

この若い夫婦が傷んだ民家の改造に着手した。まず屋根の葺き替えを計画し、地元の職人に相談したが、内部の改装も含めると1000万円を超す見積りに予算の点で折り合いがつかず頓挫してしまった。茅葺き屋根の余りに高いコストに驚いた奥さんは、持ち前の探求心でなんとか安く屋根を葺けないかと研究した結果、英国の職人に頼むことに行き着いた。英国では日本のコストの半分以下で茅葺き屋根を維持しているのである。もちろん職人の旅費や滞在費を考慮すると決して安くはならないが、地元の若手の職人グループと交流のある佐伯夫妻は、彼らと話し合う中で、我が家の屋根葺きを日本の茅葺き屋根を合理化するための実験プロジェクトとするために計画を練りなおした。美山町の若手職人グループと佐伯夫妻は日英屋根葺き技術交流プロジェクトを企画し、いくつかの研究助成基金と、国際交流基金の助成を受けて英国から職人を招くことに成功した。

1999年9月、英国人茅葺き職人口ジャー・エヴァンズさん(52歳)が美山町にやってきた。エヴァンズさんを棟梁に美山町の若手職人2人が補佐役を務め、約2カ月で佐伯家の屋根を英国風に葺き替えた。材料はこの地域で使われてきた山茅(ススキ)ではなく、宮城県の北上町のヨシが選ばれた。ヨシは茅の中では最も耐久性が高く、加えて英国で使われているものとよく似ているからであった。北上川河口の広大なヨシ原は、良質の大量のヨシを産するが、地域の茅葺き屋根の減少で茅の需要が減り、市場が全国的に拡大している。ヨシ2300束(1束は60cmの縄で縛れる束)の手

配は、全国の若手茅葺き職人のリーダー格である熊谷秋雄さんが取り仕切った。熊谷さんは、ヨシ生産者の立場から茅葺き屋根の復活に情熱を傾ける熱血漢である。屋根の棟以外は形も葺き方も全く英国式に葺き替えられた。この間、美山町の若手職人は合理化された英国の葺き方を習いながら、驚きと疑問を抱き、そしてなによりこの地域の伝統的な葺き方を改めて考え直す機会となった。英国でも30年前に茅葺き屋根が危機に瀕したが、技術の合理化を進め、後継者育成のための学校を設立して、茅葺きの技術は近代化を遂げ、今日では、そのスタイルをよしとするものはだれでも、瓦や金属板と同じように適切な価格で茅葺きを選ぶことができるという。日本各地から多くの茅葺き職人が参加したワークショップでは、合理化された英国式の葺き方に対して賛否両論があり、議論が尽きなかった。また、エヴァンズさんの紳士的な物腰と論理的な教え方はまったく新しい職人像を我々に示した。そして日本の茅葺きを守れと言い残してエヴァンズさんは帰国した。エヴァンズさんは日本の茅葺きの芸術性に理解を示しながらも、その厚すぎることの不合理性を特に指摘した。30cmあれば屋根としての雨仕舞、耐久性ともに必要十分ではないかという。しかしながら、それは茅を屋根葺き材としてのみとらえる見解である。日本の茅葺き屋根は農業生産と密接に結びついていて、たとえば古茅は最高の肥料として田畑に施された。屋根は肥料の生産工場でもあったのである。ススキ野やヨシの湿原が環境保全に果たす役割や、その資源の循環の中に茅葺き屋根を位置づけることによって初めて、21世紀の茅葺きが構想できるのである。